

Meet the Musicians

楽団員紹介

秘めたる熱誠をもつ“いぶし銀”ヴァイオリニスト

福留 史紘

Fumihito Fukutome

[第2ヴァイオリン・フォアシュペーラー]2006年3月入団

趣味: カメラを持って出かけること



©N. Ikegami

唐突な方向転換で音楽の道へ

父が習いたかったというヴァイオリン、でも自分一人で行くのは恥ずかしいので、と4歳の私と一緒に通わせたのが、楽器をはじめたきっかけです。でも、まじめにやっていたとは決して言えず、音大に行くこと決めたのは、高校3年生の夏でした。遅すぎですよね(笑)。地元では進学校といわれる高校に通っていたので、それまでは一般大学の受験勉強をしていたのですが、当時在籍していたジュニアオーケストラで、チャイコフスキーのヴァイオリン協奏曲の伴奏をした際の、ソリストの演奏の素晴らしさに心を奪われてしまいました。「音楽は一生かけてやっていく価値のあるものなのでは?」と思い、親に「音大に行く」と宣言してしまっただけです。多少とまどいながらも、あっさりとして認めてもらえて拍子抜けしたのですが、夏休み明けに高校の担任に報告したら、はあ? って言われました(笑)。そんな唐突な方向転換も、すんなりと受け入れてもらえたおかげで今があるので、両親には本当に感謝しています。ちなみに、父は今でもヴァイオリンを弾いています。

忘れることのないノット監督との初共演

初めてノット監督と共演した日のことは、強烈に覚えています。忘れられない、衝撃的な演奏会でした。リハーサルはもちろん素晴らし

く、本質をとらえていて、とてもクレバーで、哲学的な部分もあるけれども、なによりサウンドに対するイメージが明確で。それが演奏会では、より一層情報量が増えて、監督が千手観音みたいになるわけです。動作の意味や、求めているもの、そして圧倒的な熱量を、ステージではじめて出てきたように感じて「リハーサルは抜いて振っていたのか」と思うほど(笑)。今思えば、当時はすべての情報を分かりやすく振ってくれていたのかもしれないな、とも思えますね。

10月は3週連続でノット監督公演。プログラムが多彩なのでそれぞれどんな音色を作っていくのか、とても楽しみです。あと、来月のヴァイトハースさんとノット監督の共演、これも本当に楽しみです。是非多くの方に聴いていただきたいです。



小学生の頃。

インタビュー:事務局